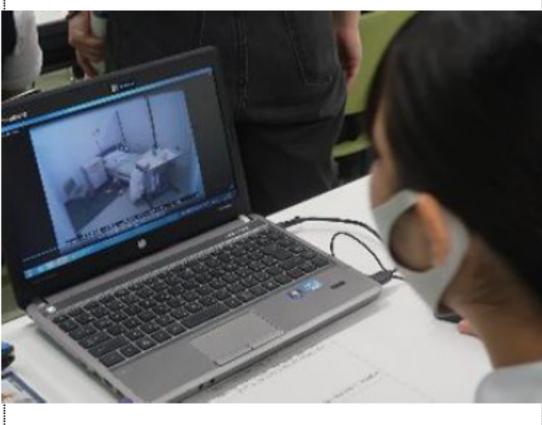


令和2(2020)年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)
 実績報告書(プログラム実施報告書)
 (研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)
 (ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI)」

課題番号： 20HT0036 プログラム名： 入院患者さんの療養環境を整えるー観察時の自分の視線を分析しようー		
	所属 研究 機関	名称 青森中央学院大学 機関の長 職・氏名 学長 佐藤 敬
	実施 代表者	部局 看護学部
		職 講師 氏名 松島 正起
開催日	令和2年9月5日	
実施場所	青森中央学院大学 7号館	
受講対象者	高校生	
参加者数	10名	
交付申請書に記載した募集人数	12名	
プログラムの目的 患者の日常生活を支えるケアは観察から始まるが、人の感覚の80%は視覚であり、見て認知することが重要である。しかし、視覚情報の認知過程には、その人の注意のあり様が大きく影響するため、同じ場面でも人によって見ているものが異なる場合がある。本プログラムでは、受講生が実際に模擬病室を観察した時の自己の視線を分析することにより、自己と他者が視線を向けるものや順序、見えるものが異なることを体験する。また、療養生活を支えるうえで基本となる療養環境の整備について考えることを目的とする。		
プログラムの実施の概要 10:00-10:20 開講式 挨拶・オリエンテーション・科研費の説明 10:20-10:50 講義①:視覚情報の認知過程 1)「見る」とは 2)注意のはたらき		
	科研費の研究成果を受講生に分かりやすく説明するため、最初に認知心理学における視覚情報の認知過程について、情報処理パラダイムをもとに説明した。次に、「選択的注意」の実験として有名なバスケットボールの映像を使い、受講生は、「見えても見えない」を体験した。人は注意を向けたものしか認知できないことを受講生が体験したうえで、研究成果について説明した。	

本研究では、タイムプレッシャーにより点滴確認に注意を集中した対象者ほど、患者が不快な状態に視線を向けていても認知できなかった。このことについて、実際の注視点の映像など実験データを示して説明した。

11:00-12:00 実験: ベッド周囲の観察 (休憩含む)

1) 観察時の注視点撮影 -アイマークレコーダを使って撮影- 2) 観察記録

演習室に模擬病室を設定し、受講生全員が模擬病室を 10 秒間観察し、その時の視線をアイマークレコーダで撮影し、どこに何が合ったのか、気になる点について観察記録を記載した。



12:00-13:00 昼食・休憩

新型コロナウイルス感染症予防を目的として、食事中の会話を控えるために、サポートスタッフの在校生 2 名が卒業論文を発表した。食事終了後に、受講生とサポートスタッフの在校生との交流の時間を設けた。感染リスクが高まらないよう、事務局職員、サポートスタッフの教員が同席し、注意を払った。



13:00-13:30 講義 : 患者さんの療養環境を整える

1) 環境とは 2) 患者さんが過ごしやすい環境整備

病室・病床環境の基準と患者の生活環境を整える際の考え方として安全・安楽・自立について、イラストを中心としたスライドを用いて説明した。

13:40-14:00 実習 : 注視点分析

1) 自分が見る時のクセ 2) 見えたものと見えなかったもの

模擬病室観察時の視線を撮影した動画を PC で繰り返し再生、また、注視点のサムネイル画像を用いて、自分がどのように視線を動かして観察していたのか特徴を見出した。比較対象として、事前に撮影したサポートスタッフの視線、他の受講生の視線をスクリーンで再生し、分析する際は、実施代表者とサポートスタッフが助言した。



14:10-14:30 実習 :ベッド周囲の観察

1)患者さんの療養環境を整える視点で見る

講義 「患者の療養環境を整える」での学びを踏まえ、ベッド周囲に置かれている物品をどのように置けば患者さんが生活しやすいのか、視線を撮影した動画を見ながら個々で検討した。

14:30-15:10 ディスカッション(実習)

1)患者さんの療養環境を整える -実際にベッド周囲の物品を整理する-

受講生に自ら活発な活動をさせるために、どのようにベッド周囲を整えればよいのか2つのグループに分けて意見交換した。ファシリテーターとして、サポートスタッフの在校生を配置し、受講生に対してヒントを出しながらディスカッションを進めた。最後に、受講生がその根拠を発表しながら、実際に物品の位置を移動させてベッド周囲を整えた。



15:10-15:30 修了式 未来博士号の授与・アンケート記入

15:30 修了・解散

今後の発展性、課題

受講生は、アイマークレコーダを使った実験に楽しんで参加し、視線分析では自分が見ているようで認知していないこと、まったく見えていないこと、注視点が人によって違うことなどに驚きの声が上がっていた。アンケートでは、受講生全員の視線を見たかったという意見もあった。今後は、選択的注意のはたらきを利用して、受講生がベッド周囲の何かに注意を集中することで、周囲のものを認知できない実験をプログラムに組み込む。そして、視線分析の時間を十分に確保し、受講生が自己の視線と他者の視線を比較検討できるようにスケジュールを調整する。

また、受講生はサポートスタッフの在校生と交流しながらディスカッションしたグループワークで活発に意見交換していた。大学の授業では、学生同士でディスカッションする機会が多く、協調性が求められる。大学進学に向けて主体的な学ぶ姿勢を身に着けるためにも、受講生同士でのディスカッションを継続する。プログラムを通して在校生と交流したことで、在校生の看護の知識に刺激を受け、周囲をよく観察すること、相手の立場になって考え行動することの大切さを学んでいた。今後も在校生と交流しながら進めるプログラムとする。

事務局との協力体制、広報活動、安全配慮について

開催に向けて、ポスターの原案作成、校正、発注について事務局と協力しながら進めた。また、受講生募集においても、大学ホームページへの掲載やオープンキャンパス・進学説明会でのチラシ配布、近隣の高等学校へのチラシ配布など、事務局・入試広報センター職員と連携しながら進めた。前日準備においては、受講生全員が、アイマークレコーダで撮影した視線の動画を閲覧できるように、事務局職員とサポートスタッフと協力しノートPCの手配、動作確認等を行った。当日は事務局職員・サポートスタッフと協力し、新型コロナウイルス感染症および熱中症の予防のため、受付で受講生の検温・体調確認、スポーツドリンクの配布などの策を講じ、細心の注意をはらいながら進めた。

